



行政と市民の関係を創造する

NPO 法人 きょうと介護保険にかかわる会

発行人 梶 宏 〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町 3-20 賀陽コーポラス 809

TEL・FAX:075-821-0688 E-mail:npokakawarukai@helen.ocn.ne.jp

会報  
95 号  
2017/8/4

## 「りあすの丘」が 実現！

～東北震災の地岩手を訪ねて～



さる6月中旬に、東北支援に深くかかわる方のお誘いで岩手県大槌町、大船渡市、陸前高田市、気仙沼市、三陸町に行ってきた。甚大な被害をもたらした東日本大震災の復興状況を実際にこの目で見ておきたいとの思いと、再開した南リアス線に乗ることが目的だった。

「津波がすべてを持っていった。残ったのは生きて自分の体と身に着けていた衣類だけだった。妻は犬とともに流されたが奇跡的に助かった」と6年間の復興の歩みをかみしめるように淡々と話し出されたのは、大船渡市で被災したリーダーの方だった。この方の住む海岸沿いの地区にもあの津波が押し寄せ、住宅は流出、半壊し、人命にも大きな被害がでた。被災した人たちは避難所、仮設住宅と移り住む中で、助け合い、支え合い、再び自分たちが暮らす街を自分たち主導で再建しようと決意し覚悟されていったという。

被災した年の12月に、生活とコミュニティの再建のためのまちづくり協議会が設立された。年が明けて、住宅再建のアンケート、住宅再建意向調査、高台移転希望者への聞き取り調査を自分たちで次々実施、専門家による住宅支援の応援団なども設立され、住宅建設に向け住民による話し合いや移転先の住宅地探しが始まった。土地探しは、すんなりとはいかなかったが、今まで住んでい

た地区に近い小高い山の持ち主21名の協力で土地提供を受けることができた。

高台移転希望の23世帯のうち、自力で再建が困難な6世帯は、当初は他所の復興住宅に入居する以外に道はなかった。そこで、戸建ての災害公営住宅を自力再建組の17戸と一緒に建設するように、行政に対して要望し、交渉に次ぐ交渉を重ねたが、集合住宅でないとダメ、制度になじまないなどと突っ返されるが、何とか頑張り抜いてみんなで暮らせる住宅団地と地域再建が可能となった。このような例は他にないという。

本年5月5日に、次代を継ぐ子どもたちによってまち開き宣言が行われた。「潮騒と共に生きる美しいまちを子々孫々に！」の合言葉が実現したのである。リーダーの「私たちは震災ですべてを失ったが、多くの支援で力づけられ、絆という貴重な財産を得た。」の言葉に胸が熱くなった。過酷な状況の中で、被災住民が多くの支援者・協力者とともに力を合わせ行政をも動かしたこの地区の方々の粘り強さに敬服した。帰り道、「りあすの丘」と名付けられた高台に建ち並ぶ住宅団地を見ながらお別れをした。

今回訪ねた被災地の復興はまだまだ道遙かと実感した。これからも被災地東北を忘れないでみんなで支援していきたいと思う。

(中川 慶子 記)

## 第82回 研修会 報告

# 地域にどう向き合う！ —これからの地域社会を考える—



日時：6月21日(水) 13:30~16:30  
会場：ひと・まち交流館京都 3階第5会議室  
講師：志藤修史氏 大谷大学文学部社会学科教授  
参加者：21名

### 地域をめぐる大きな流れ

1960年代~1970年代において第1次産業が減少、第3次産業へと大きな変化があり、社会構造が大きく変わる中で1970年後半から「地域」のことを考えるようになる。がしかし、低経済成長下の1980年代から行政のスリム化を推進する観点で「地域」の動きにプレキがかかる。(第二臨調、国鉄分割民営化など)

このような背景のもと、社会保障の構造改革で社会福祉事業が商売になるようなことは民間にやらせ、健康等(商売にならない)に関することは地域及び住民でやってもらうという民間活力の導入、規制緩和等が進められている。地方創生とは、中央は東京、それ以外は地方。地方はそれぞれがおこなう。

### 1、地域の変化とくらしの変化にどう対応するか

#### ○地域の暮らし、何が変わったのか

・家族とは何だろうか。介護などできる人に押し付けてもいいが、できない人に押し付けてどうするのか。

家族や親族の相互扶助機能が縮小化、弱体化している現在では、そういう人たちは多くいる。どうしてもできない人をベースにした施策になっていないのか。

・くらしは昔と異なり、生活様式の外部化=商品化=画一化されてきた。地域も解体している。

・社会サービス「依存」(住宅、教育、福祉)=公共サービスの整備にも問題がある。例えば、要介護の独居高齢者世帯に介護専門職が入ることによって、それまでの住民との関係を断ち切ったケースがある。プロに依存し住民は手出しをしない。プロのみでは貫徹できない。住民とともに考える姿勢が求められる。

・新たな健康破壊が拡大し、進行(労働災害、環境・食品などの公害被害)している。

#### ○くらしの声から考える(生活実態調査から)

・学生とともに各地を調査しているが、その回答では、高齢者の日頃感じている不安は老後のこと、保険料や税金が高い(生活が苦しい)、生計中心者の病気や事故。すなわち希望の持てない現状を訴えている。

・1989年の地域と2015年の地域、その変化と広がり。1989年 洛西や向島のニュータウン化→過疎化、空き家率高し、2015年 中京区の中心地→都市のマンション化増加、人口集中、教育の集中化、経済格差も大きく地域内のつながり希薄。

### 2、政策の思惑と現実

・2025年「地域包括ケアシステム」の構築、その深化として2035年「我が事・丸ごと地域共生社会」の実現。すなわち団塊世代が後期高齢者(75歳)に達し、そして終生(85歳)の時期と符合する政策。厚労省(H28年7月)によれば「福祉は与えるもの、与えられるものといったように支え手側と受け手側に分かれるのではなく、地域のあらゆる住民が役割を持ち、支え合いながら、自分らしく活躍できる地域コミュニティを育成し、公的な福祉サービスと協働して助け合いながら暮らすことができる地域共生社会」の実現としている。

具体的には「他人事」になりがちな地域づくりを地域住民が「我が事」として主体的に取り組む。市町村は地域づくりの取組支援と公的な福祉サービスへのつなぎを含めた「丸ごと」の総合相談支援の体制整備を進めるとしている。

### 3、争点となるのは「住民自治の活動」と「住民活用(動員)の活動」

・我々のことは我々が決めてやれる条件があるのか？

・我々が望んだ形に果たしてなっているのか？

・実行部隊である市町村とどう向き合っていくか、どう変えていくかが今後の争点になるだろう。

・必要なものは我々がつくるという住民の自治活動がより一層大事になる。

※ 講演終了後、感想を含め、地域についてグループワークを3グループに分かれて行う。  
内容は次回会報でお知らせします。

(田村 権一 記)



## 第 83 回 研 修 会 報 告

# これからの介護保険制度改正の方向と介護人材について ～介護事業を行っている立場から～

日 時：7月19日（水）13：30～16：30  
会 場：ひと・まち交流館京都 3階第5会議室  
講 師：山田尋志氏 地域密着型総合ケアセンター「きたおおじ」代表  
参加者：35名

### ○介護保険施行前後の状況

介護保険施行前は老人福祉制度（措置）と老人医療制度（保険）。介護保険施行 2000 年～2005 年を第 1 期と 2 期で制度の定着を図った。2006 年～2011 年は第 3 期と 4 期で予防重視型システムを作った。2012 年～第 5 期、地域包括ケアシステムを作る。2015 年～第 6 期、地域包括ケアシステムの推進。集団ケアから個別ケアへの変化、これは事業所サイドのことであり、第 5 期からは、疾病を抱えていても、障害があっても住み慣れた地域での暮らしを支える、施設から在宅へと流れが変わり、地域包括ケアシステムを推進する施策が実行されている。

地域包括ケアは幅広いイメージでとらえられていて、捉える人によって違ってくるが、筒井孝子氏の平成 26 年 10 月 28 日日経新聞に載っていた記事がわかりやすいので紹介したい。統合ケア（サービスの統合）と地域を基盤にしたケア（地域住民が主体になる）の合流であり、地域ごとに医療・介護のシステムを構築させる。そのためには市町村の役割が重要になる。

### ○急性期医療モデルと社会・生活モデル（ICF：国際生活機能分類）

患者の完治を目指す急性期医療モデルは医師を頂点にその下に看護スタッフ、患者がいるが、このモデルは、人材養成の教育制度も整い、社会的認知度や信頼度を得て、人材確保も成功している。

治らない・長期間にわたる・管理してはいけないという視点で見る社会・生活モデルでは、チームケアでその人の生活（人生）全体を見ていくものだが、このモデルは定着しておらず、生活全体を支える専門職の仕組みづくりが必要になる。

### ○介護人材の確保への三つのポイント

介護職員の推移は、2000 年要介護者 218 万人に対し 54.9 万人。2013 年要介護者 564 万人に対し 176.5 万人であるが、2025 年には 250 万人が必要と国は推定している。まず、介護専門職の養成が課題だ。介護福祉士養成の改革私案（山田案）で厚労省や京都府にも提案しているが、看護師の養成課程を参考に養成システムを作る。

看護師の社会的イメージが変わったのは事実であり、成功モデルを介護士にも当てはめる。県立大学で介護学科、国立大学に介護大学院などの設置を提案している。

人材確保で事業者问到われていることは、ケアの質への関心と熱意、介護現場の実情への関心と課題解決への共感、処遇改善加算を最大限活用する、働く環境・雇用環境への配慮など、人材育成への熱意を持つことである。これが二つ目のポイントである。

京都府による福祉人材育成認証制度は 4 年前に出来た。人材の育成、定着に取り組む事業所を認証する制度で、京都府下 1000 事業所の中で、取り組むと宣言している事業所は 550 箇所、認証を受けている事業所は 250 箇所、上位認証は 5 箇所である。事業所における、給与・キャリアパスシステムを見える化することが人材確保につながる。

三つ目は、給与・キャリアパスシステムなどの制度による報酬が課題である。資格制度と養成システム、介護専門職としての役割の明確化、専門性にふさわしい報酬などがポイントとなる。

### ○地域包括ケアの実現と介護事業所の地域展開

2015 年の高齢者介護は、生活の継続性を維持し、可能な限り在宅で暮らすことを目指している。2012 年の小規模多機能居宅介護の利用者は 5 万人、2025 年現状投影シナリオでは 8 万人、改革シナリオ（国の方針）は 40 万人になっており、中学校区に 2 箇所の割合である。小規模多機能は、通いを中心として、随時泊まりや訪問を組み合わせてサービスを提供することで、中重度になっても在宅での生活が継続できるよう支援する施設である。小規模多機能を中核にしてケアの統合、地域連携、行政を巻き込んでの地域包括ケアが望まれる。「きたおおじ」といくつかの施設では「高齢者住まい・生活支援事業」など地域サービスを展開している。

※ 講演後の 50 分を 5 グループに別れて感想・意見を話し合いました。

内容は次回会報でお知らせします。



（竹山 幸江 記）

## 第三者評価調査者フォローアップ研修会

日 時：8月31日（木）13:30～16:30

会 場：ひと・まち交流館京都 3階ミーティング室

◎ 調査者、審査委員は万障お繰り合わせの上必ず出席して下さい。



## 「ともいきのまちづくり ぶだんのくらしのしあわせを支える 仕組みづくり」

### ～同和園安心ケアサポートシステムの構築に向けて～

第 84 回  
研 修 会  
案 内

日 時：9月20日（水） 13:30～16:30

会 場：ひと・まち交流館京都 2階 第1・2会議室

講 師：橋本 武也氏 社会福祉法人同和園 常務理事園長

参加費：会員 300円 会員外 500円

内 容 これからの地域包括ケアのあり方について書かれた「地域包括ケアシステム報告書 2015年版」には人口減少社会の中での地域のあり方について書かれています。その報告書を皆さまと一緒に読み、96年の歴史を持つ社会福祉法人から見た地域福祉の実践報告をさせていただきます。社会情勢の把握と現場実践を通して地域のあり方を皆さまと一緒に考えたいと思います。

プロフィール 大谷大学卒、相談員として同和園に入職、1989年2月から現職。

制度を待つのではなく、能動的に働きかける姿勢を大事にされ、ユニットケア、看取りをはじめ、地域の要望に応じて買い物バスを走らせるなど、果敢に取り組んでおられます。趣味はツーリング、バンド活動、居合道など。

第 85 回  
研 修 会  
案 内

日 時：10月14日（土）13:30～16:30

会 場：ひと・まち交流館京都 3階第5会議室

講 師：竹下 義樹氏 弁護士

テーマ：未定

参加費：会員 300円 会員外 500円



プロフィール

中学校3年の時、相撲部の稽古が原因で網膜剥離になり失明。20歳で龍谷大学法学部に入学、30歳の時、点字受験で司法試験に合格（日本で最初）。1984年弁護士登録。京都弁護士会所属。94年につくし法律事務所（京都市）を開設。生活保護など社会保障関係の裁判では有名。2012年から日本盲人会連合会会長に就任、ほか多方面で活躍されています。

新入会員紹介（7月入会）

天野 博 さん

### 編集後記

会員の皆様、いつも会報をお読みいただきありがとうございます。

私たち編集部員は、会報の記事を充実した内容にしたい。少しでも会員の皆様に役立つ内容にしたいと考えています。そこで、皆様の趣味に関することや、現在ライフワークとして取り組まれている事などを掲載してはどうかと考えました。例えば、最近読んだ本の紹介や、学んだ事など教えていただきたいと考えています。

皆様の情報をかかわる会場で、メール、FAX、電話、口頭、郵便、なんでも結構です。皆様の様々な取り組みをお待ちしております。

これからが夏本番です。水分をしっかり取って夏を乗り切りましょう。（笠原 あけみ）